

阿仏房御書

文永一二年三月一三日 五四歳

御文委しく披見いたし候ひ畢んぬ。抑^{そもそも}宝塔の御供養の物、銭一貫文・白米・
しなじなをくり物、たしかにうけとり候ひ畢んぬ。此の趣^{おもむ}き御本尊法華經にもねんご
ろに申し上げ候。御心やすくおぼしめし候へ。

一、御文に云はく「多宝如来涌現^{ゆげん}の宝塔何事を表はし給ふや」云云。此の法門ゆゝし
き大事なり。宝塔をことわるに、天台大師文句の八に釈し給ひし時、証前・起後の二重
の宝塔あり。証前は迹門、起後は本門なり。或は又閉塔は迹門、開塔は本門、是即ち境
智の二法なり。しげきゆへにこれををく。所詮^{しよせん}三周の声聞法華經に来たりて己心の宝塔
を見ると云ふ事なり。今日蓮が弟子檀那又々かくのごとし。末法に入って法華經を持つ
男女のすがたより外には宝塔なきなり。若し然れば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華
經ととなふるものは、我が身宝塔にして、我が身又多宝如来なり。妙法蓮華經より外に
宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり。今阿仏上人の一身
は地水火風空の五大なり。此の五大は題目の五字なり。然れば阿仏房さながら宝塔、宝
塔さながら阿仏房、此より外の才覚^{むやく}無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を
以てかざりたる宝塔なり。多宝如来の宝塔を供養し給ふかとおもへば、さにては候はず、
我が身を供養し給ふ。我が身又三身即一の本覚^{ほんがく}の如来なり。かく信じ給ひて南無妙法蓮
華經と唱へ給へ。こゝさながら宝塔の住処なり。經に云はく「法華經を説くこと有らん
処は、我が此の宝塔其の前に涌現す」とはこれなり。

あまりにありがたく候へば宝塔をかきあらはしまいらせ候ぞ。子にあらずんばゆづる^譲
事なかれ。信心強盛の者に非ずんば見する事なかれ。出世の本懐とはこれなり。阿仏房
しかしながら北国の導師とも申しつべし。浄行菩薩はうまれかわり給ひてや日蓮を御と
ぶらひ給ふか。不思議なり不思議なり。此の御志をば日蓮はしらず上行菩薩の御出現の
力にまかせたてまつり候ぞ。別の故はあるべからず、あるべからず。宝塔をば夫婦ひそ
かにをがませ給へ。委しくは又々申すべく候。恐々謹言。

三月十三日

日蓮花押

阿仏房上人^{もと}所へ